

九州産業大学大学院

KYUSHU SANGYO UNIVERSITY GRADUATE SCHOOL



令和2年度 研究成果発表会

「満洲国」建国大学学生の日本語観

博士前期課程

国際文化研究科 国際文化専攻 国際文化研究分野

高太翔

主査 酒井順一郎

研究の背景

1938年に開学された「満洲国」の最高学府である建国大学は大学予科に当たる前期が3年、本科である後期が3年に亘って「満洲国」の建国精神の神髄を体得すべく人材を養成する教育機関であった。そして、「満洲国」を構成していた五族の学生（日本人、中国人、朝鮮人、モンゴル人、白系ロシア人）を共同生活させながら教育を行ったことは注目に値する。

ここで、考えられるのが教育をする際の言語である。しかし、五族平等に彼らの母語を使用せずに、多くは日本語で行われていた。では、日本人以外の民族の学生にとって日本語はどのように映っていたのであろうか。

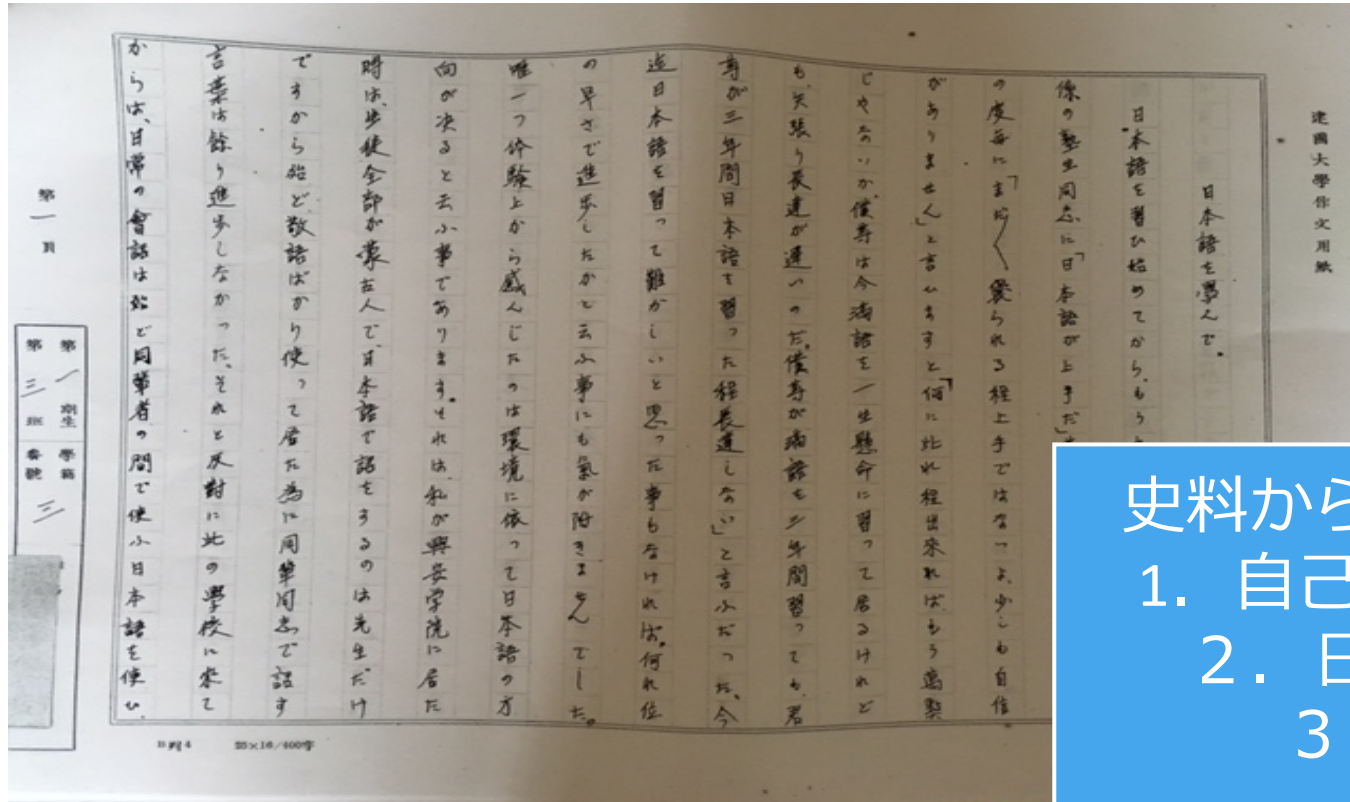
したがって、本研究では1939年の一次史料である建国大学学生（第1期生17名）の作文「日本語について」を分析し、彼らの日本語観を考察する。

研究目的

1937年、「満洲国」は所謂「新学制」を公布した。これによって、「満洲国」では日本語の地位が突出することになった。聶長林（4期生）によれば建国大学の共通語は自然に日本語であったという（岩崎宏他編『建国大学4期生会誌 楊柳別冊 幻の学園・建国大学-一中国人学生の証言-』1997年）。再説するが、では、日本人以外の民族の学生にとって日本語がどのように映ったのであろう。

以上の問題意識から、本研究は東洋文庫所蔵史料である1939年に書かれた建国大学学生（第1期生17名）の作文「日本語について（東洋文庫所蔵）」を精査し、彼らの日本語観を明らかにする。

研究概要



1. 自己利益のために日本語を受容
2. 日本語・日本文化は劣等性
3. 母語の喪失の危険性

東洋文庫所蔵史料 建国大学学生作文「日本語について」

感想・まとめ

本研究から主に以下の点を強調したい。

1. 特に漢民族の学生は、日本文化は中国文化の影響が強く、よって日本語・日本文化は劣っているという観が強い。その一方で、日本の外来文化摂取の方法を評価し、特に外来語であるカタカナの効果を評価している。
2. 「満洲国」は、決して日本語が唯一の国語でないが、現状は日本語ができなければいい職に就けない。そして、日本語能力の高い者が同族を軽視することを憂いており、母語の喪失強いてはアイデンティティの危機を強く感じている。

現時点で、高い研究レベルとはいえないが、今後さらに史料収集と分析をし研究を発展していきたい。

最後に、かつて九州産業大学に中山繁教授がいらっしゃった。実は中山先生は建国大学の数学の教授であった。中山先生についても調査していきたい。

指導教員コメント

東京まで行き、史料調査した姿勢は評価できる。また、エリートである建国大学生の日本語観に着目した点は評価できる。今後は、本格的な史料批判をし、研究を発展させてほしい。

酒井順一郎